第12回 ICOOC (国際口腔癌学会), 第24回 ICMFS (国際顎顔面外科学会) と 第19回 ICOMS (国際口腔顎顔面外科学会) からみた中国の研究と臨床の現況

森 昌彦^{1, 2)}・住友伸一郎¹⁾・式守道夫¹⁾
田中昭男²⁾・西川哲成²⁾・国分麻佑²⁾

Recent status of oral and maxillofacial surgery in the People's Republic of China under the viewpoints of 12th ICOOC, 24th ICMFS and 19th ICOMS

MORI Masahiko^{1, 2)}・SUMITOMO Shinichiro¹⁾・SHIKIMORI Michio¹⁾
TANAKA Akio²⁾・NISHIKAWA Tetsunari²⁾・KOKUBU Mayu²⁾

Abstract: We analyzed oral and poster presentations at three recent international congresses: the 12th International Congress on Oral Cancer (ICOOC) and the 24th International College for Maxillofacial Surgery (ICMFS) in 2008, and the 19th International Congress on Oral and Maxillofacial Surgery (ICOMS) in 2009, which were organized by Professor Wei-Liu Qiu in Shanghai.

A total of 300 papers related to oral tumors and oral and maxillofacial surgery, were submitted by the People's Republic of China at the 2008 and 2009 meetings. Many speakers at the main symposia and keynote addresses were from the Universities of Beijing, Shanghai, West China, Wohan, Sun-Yet-Sen, and Forth Military.

Key words: international congress (国際学会), oral and maxillofacial surgery (口腔顎顔面外科学), oral oncology (口腔腫瘍学), People's Republic of China (中華人民共和国)

緒 言

中国大陸では長い歴史の中から 1950 年に中華人民共和国 (以後、中国と略す) として共産主義の元に新生国家が誕生した。中国の口腔医学はアメリカの歯科とは異なった教育体系, つまり古いヨーロッパの口腔科学 (stomatology) の流れをもつ旧ソ連型の医学の分科として発展してきた。最近 10 年間の国別の国際誌掲載論文数と国際学会発表数を検討して, 新興国, 特に中国の躍進については本誌ですでに報告した¹⁾。今回は 2008 年と 2009 年に Wei-Liu Qiu (邱蔚六), 上海交通大学口腔医学院名誉院長のもとで開催された 3 つの口腔医学関係の国際会議について, その内容

を検討するとともに, 最近の中国のこの方面のトピックス等をあわせて報告する。

研 究 方 法

2008 年の第 12 回 International Congress on Oral Cancer (ICOOC) と同時開催された第 24 回 International College for Maxillofacial Surgery (ICMFS) および 2009 年の第 19 回 International Congress on Oral and Maxillofacial Surgery (ICOMS) はいずれも邱蔚六のもとで上海で開催された。これら 3 つの国際学会における基調講演, シンポジウム, 一般口演およびポスター発表について, 中国国内の大学別演題数を調査, 検討した。

結果および考察

1. 3 国際学会における中国からの発表演題の分布ならびに中国の大学および医科大学の口腔医学院の現状

3 つの国際会議で発表した大学口腔医学院名と医科大学口腔科名を表 1 に示す。中国では最近大学が合併を繰り返

¹⁾ 朝日大学歯学部口腔病態医療学講座口腔外科学分野
(主任: 式守道夫教授)

²⁾ 大阪歯科大学口腔病理学講座
(主任: 田中昭男教授)

¹⁾ Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Division of Oral Pathogenesis and Disease Control, Asahi University School of Dentistry (Chief: Prof. SHIKIMORI Michio)

²⁾ Department of Oral Pathology, Osaka Dental University School of Dentistry (Chief: Prof. TANAKA Akio)

受付日: 2010 年 4 月 24 日

採択日: 2011 年 1 月 25 日

表1 第12回ICOOCと第24回ICMFS（2008）ならびに第19回ICOMS（2009）における中国の大学高等教育機関からの発表数と発表形式

大 学 名	2008 ICOOCとICMFS					2009 ICOMS		
	シンポジスト	口演	示説	その他	合計	シンポジスト	口演示説	合計
上海交通大学	6	15	20	4	45	4	51	55
北京大学	2	15	3	2	22	5	50	55
華西医科大学	2	13	2	4	22	1	3	4
中山大学（広州）	1	14	23	9	47		10	10
中国医科大学		8	3	1	12			
第四軍医科大学	1	5	1		7	1	3	4
武漢医科大学	1	4	6		11		19	19
南京医科大学		3	11		14		4	4
天津医科大学		3	4	1	8		1	1
中央南方医科大学（長沙）		6	1		7			
山東医科大学		2	2	3	7		2	2
鄭州医科大学		1	3	1	5		1	1
杭州医科大学		3	1		4			
昆明医科大学		3	1		4			
哈爾濱医科大学		2	2		4		3	3
安徽医科大学		3		1	4		3	3
大連医科大学			4		4			
南昌医科大学			4		4			
河北医科大学			3	1	4			
四川医科大学			4		4		11	11
重慶医科大学				1			4	4
湖北医科大学							4	4
吉林医科大学		1			1			
江津医科大学							3	3
錦陽医科大学							3	3
浙江医科大学		2	1		3		3	3
青島医科大学		1	2		3		3	3
上海医科大学			3		3			
復旦大学（上海）	1	2			3			
広西医科大学		1	1		2			
南方医科大学（広州）		1		1	2		2	2
烏魯木齊医科大学		2			2		1	1
深川医科大学		1	1		2			
蘇州医科大学		1	1		2			
瀘州医科大学		1			1			
通化医科大学		1			1			
西安交通大学		1			1		1	1
遼寧医科大学		1			1			
首都医科大学			1		1	1		1
瀋陽軍病院			1		1			
広東人民医院			1		1			
上海第二軍医科大学			1		1		2	2
南寧医科大学							2	2
湖南医科大学							1	1
済南医科大学							1	1
海南医科大学							1	1
広西医科大学							1	1
呼和浩特医科大学							1	1
南陽医科大学							1	1
合 計	14	116	111	28	269	12	195	207

表2 International Conference on Oral Cancer (ICOOC) の開催国一覧

開催回数	開催年・月	開催場所 (国名)	会 長	副会長
第1回	1987年11月	ニューデリー (インド)	Varma	
第2回	1991年12月	ニューデリー (インド)	Badellino	Varma
第3回	1994年1月	タミールナドゥ (インド)	Badellino	Rajan
第4回	1995年9月	大垣市 (日本)	森	中島
第5回	1997年9月	ロンドン (英国)	Harris	Johnson
第6回	1999年2月	ニューデリー (インド)	Badellino	Varma
第7回	2001年4月	ヘーグ (オランダ)	Roodenberg	
第8回	2002年11月	リオデジャネイロ (ブラジル)	Herter	Kowalski
第9回	2003年11月	メルボルン (オーストラリア)	Read	O'Brian
第10回	2005年4月	アテネ (ギリシャ)	Rapidis	
第11回	2006年5月	グラド (イタリア)	Piermonte	Cortesina
第12回	2008年5月	上海 (中国)	邱	

し、大型化の傾向が著しい。大学・医科大学は一般に基礎医学部と附属病院からなり、附属病院は一般に2つ以上あり、第1臨床学部または第1医院と第2臨床学部または第2医院と称する。英文表記も次のように変わった。かつては〇〇 University School (College) of Stomatology であったが、近年は次のようになっている。北京大学口腔医学院は Peking University School and Hospital of Stomatology, 華西医科大学口腔医学院では、以前は West China Medical University of Stomatology であったが West China University School and Hospital of Stomatology となっている。首都を表す北京に対して Beijing を用いず Peking という古い英語表記にしたことは興味ある名称変更である。上海交通大学口腔医学院の臨床部門は上海第9人民病院にあるため Shanghai Ninth Peoples Hospital Affiliated Shanghai Jiao Tong University となった。

上海第9人民病院と北京大学口腔医学院病院には International Association of Oral and Maxillofacial Surgeons (IAOMS) と提携した Universal Dental E-learning (UDENTE) が開設されており、口腔顎顔面外科一般とそれに関係ある腫瘍学、インプラント、再建外科等の専門教育の実地が教育されている。UDENTE は旧名 Virtual Dental School (VIDENT) で IAOMS により運営されていた。この設立は長らく香港にいた Nabil Samman の努力によるものと考えられる。

現在の上海第9人民病院においては年間1500例以上の唇顎口蓋裂手術が行われ世界一の内容を誇っている。第2次大戦中から1970年ごろまではこの領域の最たる治療機関は Rosenthal Klinik (ライプチヒ) とプラハ大学医学部の形成外科で、ともに80から120の病床を持ち、年間1200例以上の手術が行われていた。半世紀後にその座は中国に移ったといえる。

2. ICOOC について

第1回 ICOOC は1987年ニューデリーで11月13～17日に開かれた。学会には18か国118名が出席した。第1回開催前に数年間の準備期間があり、Avanish Kumar Varma (インド) を中心に Bart W. Silverman (米国) と Wilfried Schilli (ドイツ) が協議し、Fazio M. Badellino (イタリア) を UICC の連絡者とし、Malcolm Harris (英国) と森 昌彦 (日本) を加え6名の ICOOC 委員会準備委員会で骨格を決め、まず主催国であるニューデリーで開催した。この ICOOC は口腔癌を取り扱う初めての国際会議であり、口腔癌の疫学、前癌病変、癌化、診断、転移、治療、予後、予防法、外科切除後の顎補綴 (当時、組織工学はなかった) を含むもので、いわゆる口腔顎顔面外科の学会ではない。このため第1回の会議からこの方針に立って議題が集められ、頭蓋底外科では Daniel J. Archer (英国)、顎顔面補綴では Brian F. Conroy (英国) といった専門家が出席していた。このときには既に口腔癌についての調査や手術その他研究については Jens J. Pindborg (デンマーク) がボンベイの Tata 研究所との共同研究として WHO の後援で行っていた。ICOOC はこの研究を国際的に拡大して行うものとなった。第1回から12回の ICOOC について表2に示す。

中国が ICOOC に初めて代表団を送ったのは1995年大垣で開かれた第4回 ICOOC であった。日中医学協会、在日中国大使館等と協議の結果、相当の費用を主催者が負担し上海第9人民病院の邱蔚六を含む5名が来日した。これに続き、第7回 ICOOC ヘーグ大会において邱蔚六から将来上海でこの会議を開催する案が出され、第11回2006年グラド会議で、2008年上海開催が最終的に決定された。1995年日本で開催されてから13年が経過しており、この間中国の経済発展は素晴らしく、上海の浦東地区は高層ビ

ル、立派な国際会議場、新空港、空港と市内の超高速鉄道、市地下鉄の新線が完成していた。このような状況下で第12回 ICOOC が開かれたことは真に喜ばしいことであった。

3. 第12回 ICOOC と直接関係した学会役員について

(1) Avnish Kumar Varma

ボンベイ大学卒、修士課程修了後ロンドンの Royal Marsden Cancer Center など腫瘍学を修め、1976年インド Kanpur の空軍病院の口腔癌治療ユニットに着任。ICOOC を創設し、事務局長に就任した ICOOC の機関誌として Oral Oncology (No 12 を数える) をインドの出版社 Macmillan India (SBN 0333 924541) から発行した。2009年3月死去された。

(2) Wei-Liu Qiu (邱蔚六)

1932年四川省に生まれ、1955年四川医学院（現在の華西医科大学）卒、中国口腔顔面外科学会元会長で Chinese Journal of Oral and Maxillofacial Surgery の主編集長、第12回 ICOOC 会長を務めた。上海第9人民医院で口腔顔面外科に50年間たずさわり、1980年から30名の博士、26名の修士を指導している。また、現代中国の口腔外科学教科書を編集し、上海交通大学口腔医学院の名誉院長、上海口腔科学臨床センター長、中国口腔科学会の名誉会長、中国抗癌協会、中国頭頸部癌外科学会の名誉会長の肩書きを有する。手術術式として1960年代には total bonehead tunnel flap を開発した。現在上海市の model teacher としてのメダルを授賞されている。

(3) Zhi-Yuan Zhang (張志愿)

1951年生まれ、上海第二医学院（現在の上海交通大学）卒。一般外科を Shanghai Yongpu Central Hospital で研修し、母校でさらなる研鑽を積み博士号を取得した後に大阪歯科大学解剖学教室と Mount Sinai Medical Center に留学。現在、上海交通大学口腔医学院院長、第9人民医院院長であり上海市口腔医学研究所の所長等の役職をもつ。上海口腔科学会会長、上海口腔生物医学工学会会長、第12回 ICOOC の組織委員長、Royal College of Surgeon of Edinburgh, 香港の College of Dental Surgeons の名誉会長でもある。

(4) Chen-Ping Zhang (張陳平)

1959年生まれ、上海第二医学院卒。母校で口腔顔面外科学の修士、博士課程を終えた後に、1998年から4年間 Mount Sinai Medical Center と Memorial Sloan-Kettering Cancer Centre で臨床研究に従事した。Royal College of Surgeon of Edinburgh のフェロー、シンガポール大学の客員教授であり、香港大学の口腔顎顔面外科学の博士課程を担当している。口腔顎顔面外科領域の腫瘍外科・再建外科

を専門とする。

4. 第12回 ICOOC と第24回 ICMFS の内容

両学会の記録は中国口腔顔面外科雑誌6巻増刊号1～224頁に抄録集として掲載されている²⁾。併催された両学会はシンポジウムと一般演題に分かれ、シンポジスト52名中、中国系が22名と最も多かった。その内訳は中国の大学から14名、中国の大学以外の機関3名、アメリカ在留の中国人4名、台湾1名であった（表3）。中国の大学の内訳は、上海交通大学6名、北京大学と華西医科大学が各2名、中山大学、第4軍医大学、武漢大学、復旦大学が各1名であった。中国についてアメリカ14（アメリカ在籍の中国人4名を含む）、日本10、インド3、オーストラリア2、韓国、イギリス、オランダ、ベルギー、ブラジル各1名の順であった。

頭蓋底外科のシンポジウムは2008年5月22日（木）に開催された。日本の口腔外科学会で、このセッションが開かれたことはないが、ヨーロッパ、中国等においては、頭蓋底に進展した腫瘍の外科的治療としてこの問題が議論されている。腫瘍は必ずしも癌とは限らず、神経線維腫や血管腫その他のものがある。特に血管腫で、近年、顔面、頭蓋から頭蓋底の外科的治療とその他の治療法が研究されている。口演はアプローチの方法と血管の処理が主なもので、座長は Christian Matula（オーストリア）と Chen Ping Zhan（中国）、Gregorio Sanchez Aniceto（スペイン）と Yan Pu Liu（中国）であった。演者は頭蓋底と眼窩の再建、神経外科の専門家であった。中国の口腔顎顔面外科においては頭蓋底外科を専門に行うチームにより手術が行われている。

5. 中国の特徴ある研究発表

(1) Pingyangmycin に関する演題

血管腫ならびに血管形成異常症の治療薬で、シンポジウム1題、口演5題、示説2題、合計8題の発表があった。Pingyangmycin (PYM) は Bleomycin A5 hydrochloride で組織硬化治療法として用いられている。すなわち Bleomycin の副作用である肺線維症を治療目的に改めたものである。頭頸部には先天性血管腫や血管異常を伴う症候群が見られるので、この治療薬として使用されている。Q.-H. Gae（華西医科大学）は血管腫の女性1241例、男性952例に PYM（1 mg/ml）の局所注射を行ったところ、597例（27.2%）は完全治癒している。静脈異常症は89.6%、動静脈異常は22.2%の有効率で、動脈異常には無効であった。リンパ管異常は100%有効であった。全体の PYM 量は0.2～124 mg で、1～64回の治療が行われた。Yi Fang Zhao（武漢医大）らは、PYM の局所注射（500 mg/ml～1

表3 第12回ICOOCと第24回ICMFS (2008) における中国系のシンポジストと演題名

氏 名	所 属	演 題
L. Zhon	復旦大学	喉頭癌の部分切除
Z.G. Xu	中国医学アカデミー	下喉頭癌の複合治療
S.Y. Kao	台湾軍病院	口腔癌欠損の再建
Z.M. (Thomas) Zheng	NIH	ウィルスRNAのスプライシングとパピローマウィルスの発癌
C.Y. Wang	UCLA	口腔癌の浸潤に対する分子調節
W.T. Chen	上海交通大学	口腔癌のリスクマネジメントと診断についての分子生物学技術
B. Shi	華西医科大学	中国人の唇口蓋裂についての研究
G.E. Shen	上海交通大学	口腔顔面外科のナビゲーション
C.P. Zhan	上海交通大学	口腔顎顔面外科再建の25年の経験
J.S. Dong	上海交通大学	Microsurgery repairと再建術における審美的要素について
L. Mao	MDアンダーソン病院	口腔癌の予防, 最近の状況と将来像
J.Y. Suen	アーカンサス大学	頭頸部における動静脈奇形
Z.P. Qiu	山東省血管専門病院	血管腫と血管異常とその関連疾患の診断と治療
T.J. Li	北京大学	歯肉性腫瘍の臨床と病理学的研究
Z.T. Zhou	上海交通大学	口腔癌の分子マーカーと中国医学の化学予防効果
R.M. Chen	華西医科大学	口腔扁平上皮癌の細胞増殖と腫瘍の血管増殖についての調節因子
P.Z. Tang	中国医学アカデミー	頭頸部癌の再建, 方法と選択
Z.Y. Zhang	上海交通大学	頸動脈切除と再建: 28例の臨床経験
Y.M. Zhao	第4軍医大学	顎顔面欠損についての顎補綴
Y.F. Zha	武漢大学	ヒト静脈形成異常症の内皮細胞に対するPingyangmyecinの効果
H.Z. Huang	中山大学	<i>in vitro</i> と <i>in vivo</i> における舌扁平上皮癌のcisplatin有効性についてのsurvivinの発現の影響
G.Y. Yu	北京大学	耳下腺腫瘍の治療法

$\mu\text{g/ml}$)により内皮細胞の接着分子の発現が上昇し,組織の線維化がみられることによる効果を来すと述べている. Y.S. Li (昆明第1人民医院)らは86例の血管腫にPYMの局所注射を行い,2日後にYAGレーザー(15~30nm)照射により短期間で有効な腫瘍縮小効果を認めている.さらに,中国医科大学,中山医科大学,南東大学からもPYMの有効性が報告されている.両学会における報告だけでなくPYMに関して,784例のガン腫瘍内注射による治療³⁾,297例の血管異常に対する使用経験⁴⁾,顔面頸部の静脈奇形におけるフィブリンのりとの組合せの有効性⁵⁾,といった論文も発表されている.

(2) Survivin に関する演題

Inhibitor of Apoptosis (IAPs) familyに属す癌治療の標的分子:シンポジウム1題,口演1題,示説3題の発表があった. Hong Zhang Huang (中山医科大学・シンポジスト)は舌扁平上皮癌にシスプラチンを投与した効果について述べ, survivinの発現によりシスプラチンによる癌細胞のアポトーシスが増加すると報告している. J. Li (中国医科大学)は血管腫について内皮細胞におけるbcl2とsurvivinの発現について報告している. F.S. Dongら(河北医科大学)によると唾液腺腺様嚢胞癌の遺伝子治療にsurvivin antisenseが有効と考えられるとしている. W.W.S. Li

(大連医科大学)は口腔扁平上皮癌細胞にPCNAとsurvivinの免疫染色において両者は初期癌の診断に有効で, survivinの発現は前癌病変が浸潤癌となるリスクの診断に用いることができると報告している. さらにこれらの学会以降, ヒト骨芽細胞と骨肉腫細胞に対するsurvivinの効果に関する論文がボストン大学から発表された⁶⁾.

(3) その他の口腔粘膜扁平上皮癌に関する演題

Oral Cancer Overexpressed 1 (ORAOV1)は腫瘍細胞増殖と血管の調節因子で治療に用いることができるとされ, 漢方薬 Salvia miltiorrhiza 酸 B (SalB)はハムスター実験癌の予防に有効で発癌, 異形成および血管増生を抑制したと報告された. 唾液タンパク fingerprints と血清の sideroflexin 3は口腔癌の生物マーカーとなり, 植物性ストレスホルモン abscisic acid と shikonin は口腔扁平上皮癌由来培養細胞の増殖を抑制し, 口腔扁平上皮癌の浸潤と stathmin や fascin との関係も注目されている.

6. 第19回 ICOMS (2009 上海) の分析 (表4, 5)

2009年5月23~27日, 前年度と同じ会場で, 邱蔚六の元で第19回 ICOMSと中国口腔顎顔面外科学会が併催された. ICOMSの学会長はN. Samman (香港大学)で第19回 ICOMSの会長が邱蔚六である. この学会抄録は

表4 第19回ICOMS (2009) における国別, 発表内容別演題数

国 名	PPS	OP	合計	国 名	PPS	OP	合計
China	12	202	219	Nigeria	1	2	3
USA	11	10	21	Serbia	1	4	5
UK	10	37	47	Sigapore	1	3	4
Germany	10	27	37	South Africa	1	2	3
Netherland	4	4	8	Tanzania	1		1
Finland	3		3	Thailand	1	8	9
Hongkong	3		3	Turkey	1	39	40
India	3	43	46	Venezuela	1	2	3
Israel	3	3	6	Iran		12	12
Italy	3	4	7	Poland		10	10
Japan	3	70	73	Bangladesh		3	3
Korea	3	36	39	Estonia		3	3
Belarus	2	3	5	Sri Lanka		3	3
Belgium	2	7	9	Canbodia		2	2
Brazil	2	15	17	Canada		2	2
Spein	2	9	11	Czek		2	2
Switzerland	2	7	9	Mexico		2	2
Taiwan	2		2	Oman		2	2
Argentina	1	2	3	Pakistan		2	2
Austria	1	6	7	Slovakia		2	2
Australia	1	8	9	Colombia		1	1
Chili	1	2	3	Denmark		1	1
Egypt	1	14	15	Norway		1	1
France	1		1	Philippines		1	1
Malaysia	1	3	4	Russia		1	1
New Zealand	1		1	Saudi Arabia		1	1

PPS: Presidential Lec+Plenary Lec (7 section) +Symposium (22 section)

OP: Oral and Poster Presentation

国名はPPSの多い順に記載した.

International Journal of Oral and Maxillofacial Surgery の Vol. 38 (No 5) May 2009 に掲載されている⁷⁾. 主席講義 (Presidential Lecture) は Ghali E. Ghali (ルイジアナ州立大学), 3つの全体講義 (Plenary Lecture), 22のシンポジウム, 一般口演およびポスターセッションから成っている.

全体講義とシンポジウムの合計演者は125名で, 講演者を出した国を表5に示す. 中国はその中で12名の演者を出し, 北京大学5名, 上海交通大学4名, 華西医科大学, 第四軍医科大学, 首都医科大学が各1名であった. 第19回ICOMSに出席した国々の演題数をみると, 従来と大きな違いがみられる. インド46演題, トルコ40, 韓国39, ブラジル17, エジプト15, イラン12, スペイン11, ポーランド10で, これらの中には新興国といわれる国々が含まれている. 日本からは90名ほどが登録していたがインフルエンザ流行のため20名程の出席で, 中国側は最大多数の隣国日本に対してジャパンナイトを用意したが, 20名弱の出席であった. 学会出席者で特徴的变化はアメリカからの参加が著しく減少したことで, 最近の経済状態が影響している

かも知れない.

シンポジストを含めた特別講演の演者上位5か国は, 中国, 米国, 英国, 独およびオランダであり, 明らかに欧米優位であった. 中国は米国に在住する一流学者を自国に招いて特別講演の演者に任命していた. 前年2008年に同じ会長のもとで開かれた第12回ICOOC, 第24回ICMFSにおいても同じ傾向がみられ, 中国人特別演者は17名であったが, かなりの演者はアメリカ在住者であった. 第19回ICOMSでシンポジストとして発表した中国人演者12名を表5に示す. 中国は22のシンポジウムで12名のシンポジストを出している. 演題数から推察するとシンポジウムの半分を受けもつ実力を有することが判り, このシンポジストを輩出する大学はすべて中国教育部直属の国家重点大学であった.

7. 中国口腔医学院の口腔顔面外科の新しい特徴

2008年と2009年に上海市で開かれた国際会議の内容をみると, 上位7大学が明らかに優位にあり, 国際学会にお

表5 第19回ICOMS 2009で発表した中国人シンポジストと演題名

演題番号	氏 名	所 属	演 題
PL 3	C.P. Zhang	(上海交通大学)	State-of-art in mandibular reconstruction.
SL 1.3	Z.Y. Zhang	(上海交通大学)	Salvage surgery of advanced tumors in oral, head and neck region.
SL 3.2	Y.P. Liu	(第四軍医大学)	Computerised design of bone defect reconstruction in the maxillofacial region.
SL 4.1	C. Wang	(北京大学)	Distraction osteogenesis in correction of mandibular micrognathia accompanying obstructive sleep apnoea syndrome.
SL 8.4	L. Ye	(北京大学)	Implants in anatomically compromised cases.
SL 9.3	L. Ma	(北京大学)	Are speech results inscrutable on cleft palate patients ?
SL 13.3	Y. Zhang	(北京大学)	Anatomic orbital reconstruction and late correction of post-traumatic enophthalmos.
SL 15.1	G.E. Shen	(上海交通大学)	Navigation-guided oral and maxillofacial surgery.
SL 16.1	S. Wang	(首都医科大学)	Management of radiation-induced salivary gland hypofunction.
SL 16.3	G.Y. Yu	(北京大学)	Long-term follow-up after autologous microvascular submandibular gland transfer for severe keratoconjunctivitis sicca.
SL 19.1	C. Yong	(上海交通大学)	Is temporomandibular joint disk position important ?
SL 19.3	J. Hu	(華西医科大学)	Autogenous coronoid process grafts for condylar reconstruction in temporomandibular joint ankylosis.

演題番号は抄録集⁷⁾の番号に準拠した。

いて特別講演やシンポジウムの演者を出している。7大学のうち特に大きな地位を占めているのは北京大学口腔医学院と上海交通大学口腔医学院の2校で、2009年の第19回ICOMSにおいて、中国の出題した全演題数209の半分、110演題は北京と上海の2校からのものである。この2校を追うのが中山大学口腔医学院で、最近、新病院を建て、最新の施設と外国在住の優れた中国人を帰国させ就任させている。おそらくこの大学は近い将来、北京・上海と同等の実力を発揮するものと考えられる。

現在中国の大学口腔医学院すべてには大学院は設置されていないが、上述の国家重点大学の口腔医学院には設置されており、中国全土から修士、博士課程の優れた学生が入学している。基礎、臨床に関係なく人材は北京と上海に集まり、したがってこの2つの大学はたくさんの人材を持っている。これら国家重点大学の口腔医学院からは一流国際誌に論文を出し、国際的地位を高めている。このような実態を表現した英文の大学名が採用されている。例えばPeking University School and Hospital of Stomatology（北京大学口腔医学院）、School and Hospital of Stomatology, Wuhan University（武汉大学口腔医学院）と中国語と英語で表記されている。中山大学（広州）口腔医学院については複雑で、次のように中国語と英語で表記されている。この英文表記はSecond Affiliated Hospital, Sun-Yet-Sen UniversityでSun-Yet-Senとは広東語で孫逸仙のことで日本語では孫文のことである。中国大陆ではこの孫文を北京語の発音を用いずに広東語を使用することにより、他の中山大学と区別している。中山大学口腔医学院は中国大陆では光华口腔医学院という。光华口腔医学院の英文表記は

なく、この場合には中山大学第二附属医院口腔医学院の英文を用いることになっている。

中国における口腔顎顔面外科の拠点は、上海交通大学第9人民医院にある。中国の口腔外科関係の教科書においてもみられる如く、第2世代の教科書の編集から上海の大学は指導的立場にあった。したがって一朝一夕で上海が中国のトップに立ったのではなく、約半世紀にわたり、スタッフを日本、アメリカ、ヨーロッパ先進国に留学させ、先進国の頭頸部外科その他の技術を取り入れ、中国独自の学問と臨床体系を整えてきたといえる。

2010年の中国口腔顔面外科学会雑誌（第9巻3号195-198頁）に第19回ICOMS開催に至る経緯と国際会議の内容が邱蔚六によって報告されるとともに、1986年に創立された中華医学会口腔科分会口腔顎顔面外科学会の組織委員8名の写真と紹介も掲載された。

結 論

2008年と2009年に上海交通大学第9病院が主幹となり、邱蔚六が主催した第12回ICOOCと第24回ICMFS（2008年）ならびに第19回ICOMS（2009年）の国際会議における中国からの発表を分析し、最近の中国における口腔顎顔面外科の臨床と基礎研究の動向について述べた。2008年と2009年の国際会議において、中国ではこれらを主催するために、主題やシンポジウムの演者として2008年は14名、2009年は12名を出し、中国内の各地域からおおよそ300題の口腔腫瘍と口腔顎顔面外科についての演題を集め成功をおさめた。2008年、2009年の両学会において特別講演で

発表した中国人研究者の氏名と所属について紹介するとともに大学別の発表演題数について表示し、さらに中国独自の発表内容について紹介した。

この資料は日本の医学、歯学部さらに口腔外科学講座を訪れる中国関係者の所属大学の活性度を示すもので、今後の日中関係を考える上で重要な事項となるであろう。

参 考 文 献

- 1) 森 昌彦, 住友伸一郎, 他: 口腔顎顔面外科・口腔病理学・口腔癌に関する国際誌投稿論文数と国際学会演題数からみた国際関係. 日口外誌 56: 636-644 2010.
- 2) Proceeding of 12th International Congress on Oral Cancer and 24th International Congress of Maxillofacial Surgeons. 中口外誌 増刊号 6: 1-224 2008.
- 3) Zhao, S.F., Shou, W.D., et al.: Treatment of sublingual cyst with intracystic injection of pingyangmycin-clinical results in 785 consecutive cases. Clin J Oral Maxillofac Surg 8: 47-49 2010.
- 4) Zang, J.W., Yang, X.J., et al.: Intralesional injection of Pingyangmycin for vascular malformations in oral and maxillofacial regions.: An evaluation of 297 consecutive patients. Oral Oncol 45: 872-876 2009.
- 5) Chen, W.L., Huang, Z.Q., et al.: Percutaneous sclerotherapy of massive venous malformation of the face and neck using fibrin glue combined with OK-432 and Pingyangmysin. Head and Neck 32: 467-472 2010.
- 6) Ortiz, J., Marquez, M. et al.: Survivin activity in normal human osteoblast and osteosarcoma cells. Clin J Oral Maxillofac Surg 8: 241-249 2010.
- 7) Abstracts of the 19th International Conference on Oral and Maxillofacial Surgery. Int J Oral Maxillofac Surg 38: 397-608 2009.